

■ 概況

1/23~1/29のNYMEX・WTIは、53.14~55.59ドルの範囲で推移した。

1月30日は、世界的な新型コロナウイルスの拡大への警戒感が高まる中、2日続落した。OPECプラスが3月開催予定の閣僚会議を2月に前倒しすることで検討中との報道は、下値を支えた。3月限終値は前日比1.19ドル安の52.14ドル。

週末31日は、引き続き、新型コロナウイルスの影響で石油需要が落ち込むとの懸念から、3日続落し、約半年ぶりの安値を付けた。OPECプラスの合同閣僚会議の前倒し案にロシアが協力的であるとの報道が下値を支えた。ペーカーヒューズ社発表の米国稼働石油掘削機は675基と前週比1基減と3週ぶりの減少となった。3月限終値は前日比0.58ドル安の51.56ドル。

週明け3日は、新型コロナウイルスの拡大で、シノバックをはじめ中国の多数の製油所で処理量が減少しているとの報道を受け、4営業日続落した。一時は、50ドルを割り込んだ。OPECプラスは、今月14~15日に会合を開催し、50万b/dの追加減産を検討するとの報道も上昇要因にならなかった。3月限終値は、前営業日比1.45ドル安の50.11ドル。

4日は、前日のOPECプラスの追加減産協議の報道で買いが先行したが、追加減産への懐疑論も浮上、新型コロナウイルスによる世界経済停滞懸念が大きいことから、5営業日続落し、終値で1年1か月ぶりに50ドルを割り込んだ。3月限終値は前日比0.50ドル安の49.61ドル。

5日は、新型コロナウイルスの治療薬開発に前進が見られたとの報道を好感し、6営業日ぶりに反発した。また、米国株価も上昇、安値拾いの買いも出た。米国エネルギー情報局(EIA)の在庫週報の発表は、原油在庫が前週比340万バレル増と市

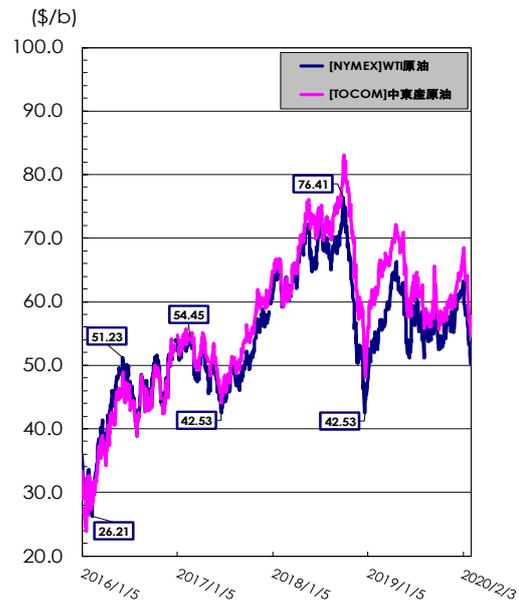
場予をやや上回る積み増しだったが、大きな影響はなかった。3月限の終値は前日比1.14ドル高の50.75ドル。

アジアの指標原油である中東産ドバイ原油/東京市場(3月渡し)は1月23日~29日の間59.00~62.30ドルの範囲で推移した。1月30日58.40ドル、31日58.10ドル、2月3日55.10ドル、4日53.80ドル、5日53.70ドルで推移した。

為替は1月23~29日の間108.87~19.72円の範囲で推移した。1月30日109.01円、31日109.06円、2月3日108.52円、4日108.61円、5日109.46円で推移した。

そのような中で、2月3日時点の小売価格は、ガソリンが前週比0.3円の値下がり、軽油も同0.3円の値下がり、灯油は同3円の値下がり(18%ベース)だった。ガソリンは2週連続の値下がり、軽油は13週ぶりに値下がり、灯油は13週ぶりの値下がりがだった。この週(2月第1週)の原油コストは大きく値下がりし、次週の元売の卸価格はガソリン・軽油・灯油ともに全社4.0円値下げとなった。

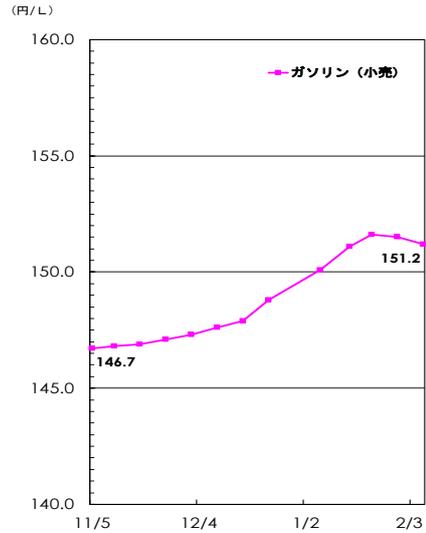
原油		今週	前週比	前年比
需給	原油処理量 (千kl)	1/26 ~ 2/1	3,347 ▼ -70	▼ -
	トッパー稼働率 (%)	"	85.5 ▼ -1.8	▼ -
	原油在庫量 (千kl)	2/1	10,903 ▼ -498	▼ -
価格	中東産原油(TOCOM) (\$/bbl)	2/3	54.67 ▼ -2.34	▼ -7.7
	WTI原油(NYMEX) (\$/bbl)	2/3	50.11 ▼ -3.03	▼ -4.5
	原油CIF単価 (\$/bbl)	1月上旬	69.13 ▲ 1.58	▲ 6.45
	①原油CIF単価 (¥/kl)	"	47,598 ▲ 1,279	▲ 4,488
	②ドル換算レート (¥/\$)	"	109.46 ▼ -0.45	▼ -0.11
	外国為替TTSレート (¥/\$)	2/3	109.52 ▲ 0.54	▲ 1.01



(単位: 千kl、円/%)

ガソリン		今週	前週比	前年比	
需給	生産	1/26 ~ 2/1	943 ▲ 73	▼ -	
	輸入	"	n.a.	n.a.	
	出荷	"	811 ▼ -2	▼ -	
	輸出	"	116 ▲ 102	▼ -	
	在庫	2/1	1,811 ▲ 16	▲ -	
価格	業転 [陸上ローリー 4地区平均] (RIM)	1/28 ~ 2/3	59.4 ▼ -2.4	▲ 3.4	
	先物 [期近物/終値]	(TOCOM/東京湾)	1/28 ~ 2/3	53.3 ▼ -2.9	▲ 1.7
		(TOCOM/中部)	2/3	54.5 ▼ -3.0	▼ -0.3
	小売 [週動向] (資工庁公表)	2/3	151.2 ▼ -0.3	▲ 8.1	

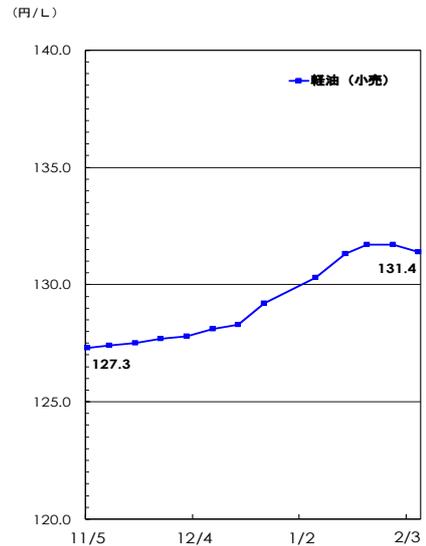
※業転、先物価格は税抜き価格



(単位: 千kl、円/%)

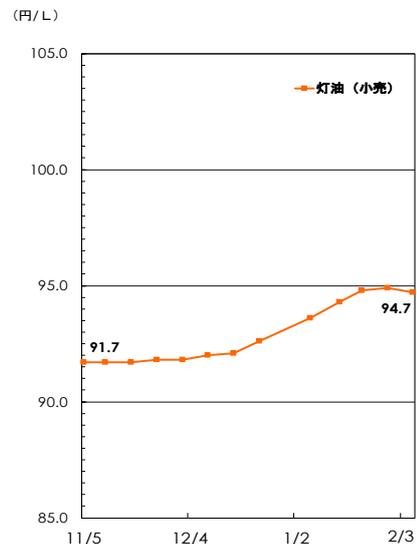
軽油		今週	前週比	前年比	
需給	生産	1/26 ~ 2/1	712 ▼ -67	▼ -	
	輸入	"	n.a.	n.a.	
	出荷	"	545 ▼ -150	▼ -	
	輸出	"	73 ▼ -70	▼ -	
	在庫	2/1	1,667 ▲ 95	▲ -	
価格	業転 [陸上ローリー 4地区平均] (RIM)	1/28 ~ 2/3	63.9 ▼ -1.5	▲ 4.0	
	先物 [期近物/終値]	(TOCOM/東京湾)	1/28 ~ 2/3	64.0 ▼ -2.1	▲ 2.8
		(TOCOM/中部)	2/3	-	-
	小売 [週動向] (資工庁公表)	2/3	131.4 ▼ -0.3	▲ 7.2	

※業転、先物価格は税抜き価格



(単位: 千kl、円/%)

灯油		今週	前週比	前年比	
需給	生産	1/26 ~ 2/1	320 ▼ -124	▼ -	
	輸入	"	n.a.	n.a.	
	出荷	"	371 ▼ -20	▼ -	
	輸出	"	0 ▼ -67	▼ -	
	在庫	2/1	2,039 ▼ -51	▲ -	
価格	業転 [陸上ローリー 4地区平均] (RIM)	1/28 ~ 2/3	63.0 ▼ -1.7	▲ 3.3	
	先物 [期近物/終値]	(TOCOM/東京湾)	1/28 ~ 2/3	56.0 ▼ -4.1	▼ -3.0
		(TOCOM/中部)	2/3	58.5 ▼ -2.5	▼ -2.5
	小売 [週動向] (資工庁公表)	2/3	94.7 ▼ -0.2	▲ 6.0	



■ 関連情報

1 海外/原油

2月5日のNYMEX市場WTI原油は、新型コロナウイルスの治療薬開発に前進が見られたとの報道を好感し、6営業日ぶりに反発した。また、米国株価も上昇、安値拾いの買いも出て、投資家のリスク選好姿勢が幾分戻った。米国エネルギー情報局(EIA)の在庫週報の発表は、原油在庫が前週比340万バレル増と市場予想(280万バレル増)をやや上回る積み増しに対し、ガソリン在庫が前週比10万バレル減と市場予想(210万バレル増)に反する取り崩しで、まちまちの結果だったことから、大きな影響はなかった。3月限の終値は前日比1.14ドル高の50.75ドル、4月限の終値は同1.12ドル高の50.92ドル。

EIAによると、2月3日時点のガソリンの小売価格は、前週比5.1セント値下がり1ガロン2.455ドル(70.7円/ℓ)、ディーゼルは同5.4セント値下がり2.956ドル(85.4円/ℓ)となった。ガソリンは4週連続の値下がり、ディーゼルも4週連続の値下がりだった。

2 国内/製品需給 (1) 出荷

石連週報によれば、2020年1月26日～2月1日に休止したトッパー能力は19.0万バレル/日で、前週に対して1.7万バレル/日増加した(全処理能力は351.9万バレル/日)。原油処理量は334.7万klと、前週に比べ7.0万kl減少。前年に対しては18.5万klの減少。トッパー稼働率は85.5%と前週に対して1.8ポイントの減少、前年に対しては4.7ポイントの減少となった。

生産は前週に比べてガソリン、ジェットが増加となり、その他の油種で減少となった。ガソリン/8.3%増、ジェット/187.5%増、灯油/27.9%減、軽油/8.6%減、A重油/17.8%減、C重油/16.0%減。今週のC重油の輸入は0.0万kl(前週比0.6万kl減)。軽油の輸出は7.3万kl(前週比7.0万kl減)。

出荷(輸入分を除く)は、前週比でジェット、C重油で増加となり、その他の油種で減少となった。前年比ではジェットが増加となり、その他の油種で減少となった。ガソリンの出荷は81.1万kl(対前週0.2%減)と3週連続で減少となり、24週連続で100万klを下回った。ジェット10.3万kl(対前週85.2%増)、灯油37.1万kl(対前週5.2%減)、軽油54.5万kl(対前週

21.7%減)、A重油17.7万kl(対前週31.8%減)、C重油15.1万kl(対前週11.1%増)。

(単位:千kl)

	今週 (1/26 ~ 2/1)	前週 (1/19 ~ 1/25)	前週比	
ガソリン	811	813	▼ -2	(-0%)
ジェット燃料	103	56	▲ 47	(84%)
灯油	371	391	▼ -20	(-5%)
軽油	545	695	▼ -150	(-22%)
A重油	177	259	▼ -82	(-32%)
C重油	151	136	▲ 15	(11%)
合計	2,158	2,350	▼ -192	(-8%)

※今週出荷量 = (前週末在庫 + 今週生産 + 今週輸入) - (今週輸出 + 今週末在庫)

2 国内/製品需給 (2) 在庫

2月1日時点の在庫は、灯油、A重油で取り崩しとなり、その他の油種で積み増しとなった。前年に対してはA重油とC重油で減少となり、その他の油種で増加となった。

ガソリンは181.1万kl、前週差1.6万kl増。前年に対しては14.4万kl多い。

灯油は203.9万kl、前週差5.1万kl減。前年に対しては11.8万kl多い。

軽油は166.7万kl、前週差9.5万kl増。前年に対しては5.8万kl多い。

A重油は74.8万kl、前週差0.5万kl減。前年に対しては4.2万kl少ない。

C重油は192.9万kl、前週差1.7万kl増。前年に対しては17.5万kl少ない。

(単位:千kl)

	今週 (2/1)	前週 (1/25)	前週比	
ガソリン	1,811	1,795	▲ 16	(1%)
ジェット燃料	811	775	▲ 36	(5%)
灯油	2,039	2,090	▼ -51	(-2%)
軽油	1,667	1,572	▲ 95	(6%)
A重油	748	753	▼ -5	(-1%)
C重油	1,929	1,912	▲ 17	(1%)
合計	9,005	8,897	▲ 108	(1.2%)

3 国内/製品卸売価格 (1) 元売会社 仕切価格改定動向

1月28日～2月3日の原油価格は、前週比で大きく値下がりし、為替も円高で、原油コストは大きく値下がりしたものと見られる。

陸上スポット価格は、1月28日～2月3日の間、ガソリン111～114円台で大きく値下がり、軽油63～64円台で大きく値下がり、灯油61～63円台で大きく値下がりして推移した。

海上スポット価格は、同期間で、ガソリン113～116円台で大きく値下がり、軽油65～67円台で大きく値下がり、灯油56～60円台で値上がり後大きく値下がりして推移した。

先物価格は、同期間で、ガソリン105～108円台で値上がり後大きく値下がり、軽油62～64円台で値上がり後大きく値下がり、灯油54～57円台で大きく値下がりして推移した。

次週の元売卸価格は、ガソリン・灯油・軽油ともに、全社4.0円の値下げとなった。

3 国内/製品卸売価格 (2) 業転価格・先物価格動向

1月28日～2月3日の製品スポット市況は、1月21日～27日平均と比べ、全油種・全取引で値下がりした。

直近の陸上スポット価格(1/28～2/3、千葉・川崎・中京・阪神の4地区の陸上ラック価格平均値)は、前週比で、ガソリンは2.4円の値下がり、灯油は1.7円の値下がり、軽油は1.5円の値下がりだった。

東京湾渡しの海上スポット平均価格は、前週比で、ガソリンは3.4円の値下がり、灯油は3.6円の値下がり、軽油は1.7円の値下がりだった。

先物価格は、前週比で、ガソリンが2.9円の値下がり、灯油は4.1円の値下がり、軽油は2.1円の値下がりだった。

2月第2週の大手元売の卸価格は、ガソリン・軽油・灯油ともに、全社4.0円の値下げになった。

[陸上ローリー4地区平均]	今週 (1/28 ~ 2/3)	前週 (1/21 ~ 1/27)	前週比
レギュラー	59.4	61.8	▼ -2.4
灯油	63.0	64.7	▼ -1.7
軽油	63.9	65.4	▼ -1.5

[期近物/終値] [平均]	今週 (1/28 ~ 2/3)	前週 (1/21 ~ 1/27)	前週比
レギュラー	53.3	56.2	▼ -2.9
灯油	56.0	60.1	▼ -4.1
軽油	64.0	66.1	▼ -2.1

※上記価格は税抜き価格

油種	現物	先物	平均
ガソリン	▼ -2.4	▼ -2.9	▼ -2.6
灯油	▼ -1.7	▼ -4.1	▼ -2.9
軽油	▼ -1.5	▼ -2.1	▼ -1.8
A重油	▼ -1.1		

(出所) 現物: RIM社陸上ローリー4地区平均価格

(千葉・川崎・中京・阪神)

先物: TOCOM京浜地区海上バージ渡し平均価格

4 国内/製品小売価格

2月3日時点のSS店頭価格は、ガソリンが前回比0.3円安の151.2円、軽油は同0.3円安の131.4円、灯油は18%ベースで同3円安の1,705円(1%ベースでは同0.2円安の94.7円)。ガソリンは2週連続の値下がり、軽油は13週ぶりの値下がり、灯油13週ぶりの値下がりだった。

ガソリンについて、都道府県別には、値上がり7県、横ばいが9府県、値下がり31都道府県となった。全国最安値は岡山県の146.4円(同0.5円安)、その次に安いのは宮城県146.6円(同0.8円安)、最高値は長崎県の162.4円(同0.6円安)。最も値上がりしたのは同0.5円高の鹿児島県(161.1

円)、横ばいは長野県等9府県、最も値下がりしたのは同1.0円安の北海道(150.4円)だった。

先週の原油コストは値下がりし、今週適用の大手元売の卸価格は、ガソリン・軽油・灯油ともに、1.0～1.5円の値下げとなった。今週は、原油価格は大きく値下がりし、為替レートも円高で、原油コストは大きく値下がりした。次週適用の元売の卸価格は、ガソリン・軽油・灯油ともに、全社4.0円の値下げとなった。次回調査時(2月10日)のガソリン・灯油の小売価格は、値下がり予想される。

	今週 (2/3)	前週 (1/27)	前週比	直近高値
レギュラー	151.2	151.5	▼ -0.3	08/8/4 185.1
灯油	94.7	94.9	▼ -0.2	08/8/11 132.1
軽油	131.4	131.7	▼ -0.3	08/8/4 167.4

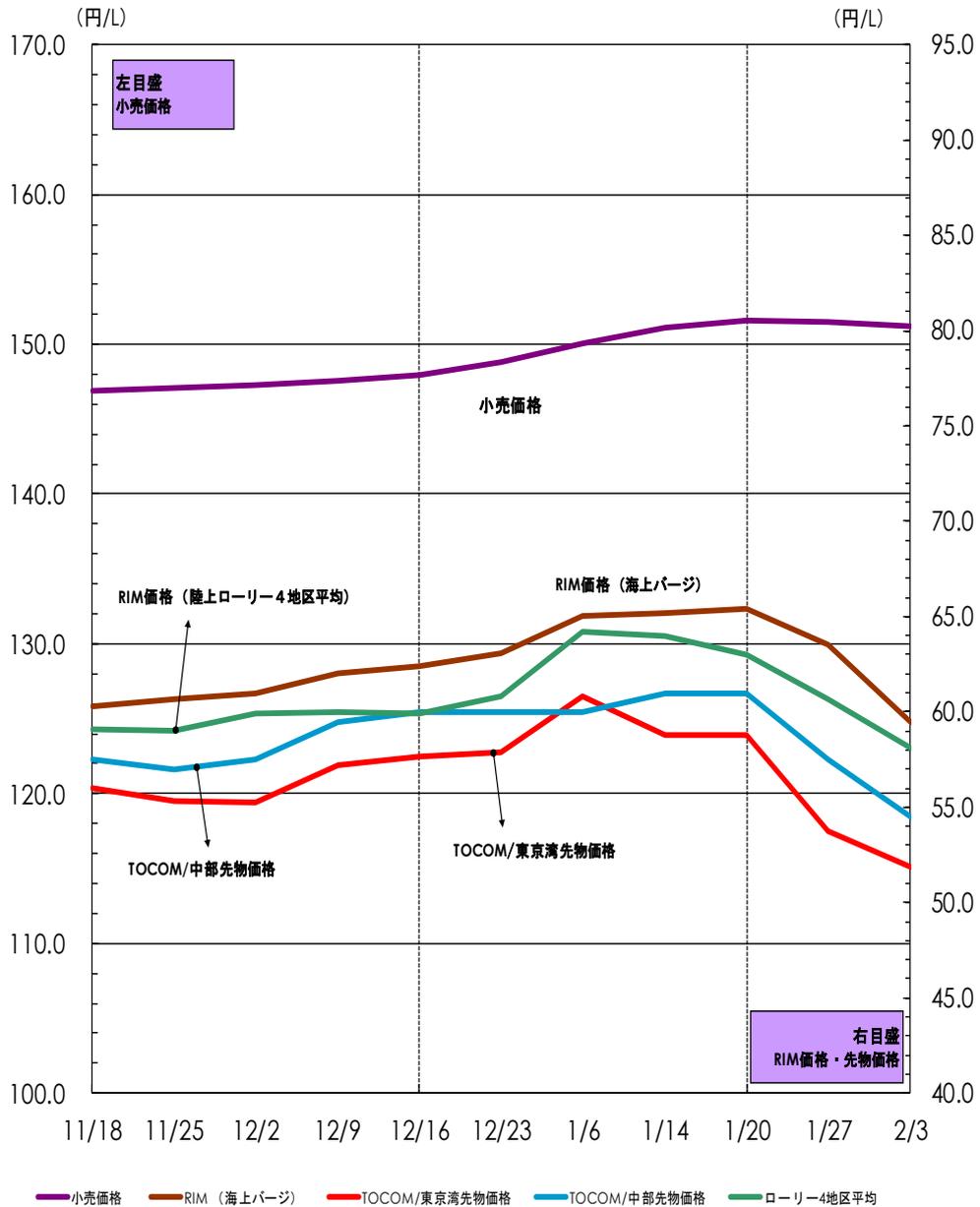
※ 現金一般価格の全国平均値 (消費税込み)

07年4月以降 2,000店舗を対象。

直近高値とは2003年10月以降の最高値。

ガソリン価格推移

(2019/11/18 ~ 2020/2/3)



(注)①「小売価格」は消費税込みの価格 RIM価格・TOCOM先物価格は税抜き価格
 ②RIM価格(陸上ローリー)は4地区平均価格

■ お知らせ

本レポートは当センターのホームページ (<https://oil-info.ieej.or.jp>) にも掲載しています。
次回(2019第43号)の公表は、2/14(金)14:00です。

「セルフSS出店状況」(令和元年9月末現在)は、12月25日(水)14:00に公表しました。当センターのホームページをご覧ください。

本レポートのご利用について

本レポートについて、テキスト、グラフィックス及びその他の情報(以下、併せて「ドキュメント」)に関わるすべての知的所有権は、一般財団法人日本エネルギー経済研究所石油情報センター(以下、当センター)又は当センターヘドキュメントを提供している第三者へ独占的に帰属します。
当センターの事前の書面による承諾を得ることなく、ドキュメントを転用、複製、改変等の一切を固く禁じています。
また、ドキュメント内容に関しては万全を期していますが、その内容の正確性および安全性を保証するものではありません。

「ウィークリー オイル マーケット レビュー」とは

平成16年5月に経済産業省資源エネルギー庁資源・燃料部石油流通課 主催の「石油製品市場動向研究会」が取りまとめた中間報告で、「わが国石油産業における市場機能、価格発見機能が更に強固なものとなることが望まれるとともに、中期的な課題として、石油産業において確立していく市場機能、価格発見機能に基づく合理的な価格認識及びそれを踏まえた自己責任の下での経営判断の必要性について、石油産業関係者の認識が更に深まることにより、わが国の基幹産業である石油産業全体としての合理性、活力が一層高まることを期待したい。」と提案されています。
当センターでは、これを受けて石油連盟、全国石油商業組合連合会をはじめ関係機関等の協力を得て、石油関係者、企業の経営者層(特に給油所経営に携わる方々)から一般消費者の方々に対し、原油・石油製品需給や価格動向を的確に理解するツールの一つとして、「ウィークリーオイルマーケットレビュー」を平成17年5月より定期的に発信しています。

本レポート掲載データの出所について

①【原油・石油製品需給】〈石連週報〉

石油連盟(石連)「原油・石油製品供給統計」週報データを千KL単位に換算して採用。
「出荷」は当センターの推計。

②【原油・先物価格】〈WTI原油、中東産原油〉

WTI原油は、ニューヨーク商業取引所(New York Mercantile Exchange : NYMEX) WTI原油先物の期近物・終値を採用。

中東産原油は、東京商品取引所(The Tokyo Commodity Exchange : TOCOM) 中東産原油の期近物・終値を採用。 ※「二番限(翌月限)」

中東産原油は、ドバイ原油及びオマーン原油の平均価格を指標としている。為替換算レートとして、三菱東京UFJ銀行発表TTM (Telegraphic Transfer Middle rate : 中値) を採用。

原油CIF単価は、財務省貿易統計「原油・粗油平均CIF単価」(旬間値)を基に、石油連盟が試算したドル表示の参考値を採用。

③【国内製品・元売仕切価格】

元売仕切価格は、元売会社(一次卸)と系列特約店など(二次卸)との間で売買される卸価格。

元売会社は、平成22年4月以降、現行の新価格体系を見直し、原油や製品相場、他社仕切りなどの動向を総合的に判断し、具体的方針を決める方式に変更。さらに平成26年6月以降、原油コストをより重視する方式に変更している。

④【国内製品・業転価格】〈RIM業転〉

国内陸上ローリー価格は、リム情報開発株式会社(RIM)「LORRY RACK・レポート」の千葉、川崎、中京、阪神の4地区の平均値を採用(いわゆる4RIM価格とは異なる)。

⑤【国内製品・先物価格】〈TOCOM〉

TOCOM 東京湾 及び中部石油製品期近物・終値を採用。

TOCOM東京湾は京浜地区海上バージ渡し価格(平均値)、TOCOM中部は中部地区陸上ローリー渡し価格(平均値)。

⑥【国内製品・小売価格】〈週動向調査〉

約2,000 SSを対象に週次ベースのSS店頭における店頭現金価格の全国平均値を採用(資工庁公表)。原則として、毎週(月)時点の価格を調査し(水)14:00に公表(資源エネルギー庁HPに掲載)。